

# 謎の巨石島 活写

太平洋の島国ミクロネシア連邦にある、巨石で築かれた古代の海上都市「ナンマトル（ナン・マドール）遺跡」が昨年、国連教育・科学・文化機関（ユネスコ）の世界遺産に登録されたのを記念して、その魅力を伝える写真展が31日、奈良市公納堂町の「ナラマチギャラリー2016」で始まる。登録申請に協力したNPO法人「パシフィカ・ルネサンス」と関西外国語大の主催。同法人代表で、オセアニア考古学研究者の長岡拓也さん（48）（橿原市）は「伝説のムシ大陸の一部ではないか、とも言われた遺跡で、古代巨石文明の謎に触れるチャンス。多くの人が見てほしい」と話している。

（山本哲生）

同遺跡は、同連邦の首都バキールがあるボンペイ島の南東・チャムエン島の浅瀬（約105m）に浮かぶ約1000の人工島。1516世紀頃に「シャウテレル王朝」が築いたとされる。

最大90cmの巨石を含む膨大な数の柱状玄武岩を積み上げてつくられた島々は、歴代の王墓や王宮、神殿、住居の土台などで、現在はマングローブの密林に覆われ、崩壊が進んでいる。

長岡さんは県立郡山高から広島に進み、考古学を専攻。卒業後、青年海外協力隊員としてポンペイ州歴史保護局で3年間勤務し、さらにニュージーランド・オークランド大の大学院で学んだ。帰国後、「急速に失われつつあるオセアニアの伝統文化や歴史遺産の保存、振興に貢

## ミクロネシア遺跡 研究者ら展示

献したい」と、2014年9月、青年海外協力隊OBRとNPO法人を設立した。文字文化がないミクロネシアでは、口頭での伝承（語り）伝えるのが歴史を解き明かす手がかり。長岡さんは現地語をマスター

## 世界遺産登録記念 31日から奈良

し、1年の半分以上をミクロネシアに滞在。村の古老から伝承を聞き取ってYouTubeで公開したり、歴史・文化に関する情報を発信したりしている。

ナンマトル遺跡の世界遺産登録には、長岡さんをはじめ多くの日本人研究者が、国際協力チームの一員として支援した。文化庁の外郭団体・文化遺産国際協力コンソーシアム（東京）は11年2月に現地調査を行い、関西大の片岡修教授や、東京文化財研究所の石村智氏らが報告書をまとめ、これを基に15年1月、ミクロネシア連邦政府がユネスコに申請。昨年7月に登録が決まった。

写真展は石村氏が監修。同調査で撮影された写真など25枚をパネル展示する。現地に滞在中の長岡さんは「観光の目玉になるとの期待が高まっているが、遺跡の保存や管理が今後の課題。ミクロネシアには、過去に日本が統治した時代があり、日本との関係は深い。多くの日本人の関心を持ってほしい」と話す。

写真展は2月5日まで。午前11時～午後6時（最終日は5時まで）。2月7～12日には、東京都台東区の古民家を改装した展示施設「HAGISO」でも開催する。

問い合わせはNPO法人「パシフィカ・ルネサンス」（メール pasifika\_renaissance@gmail.com）。



村の古老から聞き取りをする長岡さん(右) (ミクロネシアで) —長岡さん提供



ミクロネシア・ナンマトル遺跡の巨石で築かれた人工島—片岡教授提供